LA 通信

第 596 回：論文やレポートの書き方について（8）（DM）

みなさんこんにちは。LA 毎週月曜 12 時～15 時担当、博士課程 2 年の DM です。

前回（第 594 回）で問題設定の説明と実践が終わりました。今回は、その先の手順を説明していく準備として、私の問題設定について補足をしていきたいと思います。

この連載の最初の回で、私は、「問題設定の後に資料調査をする」という手順を説明しました。ところが、前回の掲載分を振り返ると、実際にはこの二つが同時並行で進んでいるのが分かります。言っていることとやっていることが違っています。

ここで強調したいのは、論文（レポート）の作成にも基礎と応用があるということです。「問題設定の後に資料調査をする」というのは、いわば基礎的な手順です。実践するときには、これを自分に合わせて応用していかなければいけないのです。

一般的には、授業のレポート課題というのは、授業で習った知識と関連する事柄を書くものです。とはいえ、題材を自由に選択してよいレポート課題もありますし、そもそも授業の内容が難解なこともあります。私の場合で言えば、調査対象である谷崎潤一郎についてそもそも何も知らないわけです。

そうなると、問題設定の前段階として、基礎知識を習得しなくてはなりません。だからこそ、「問題設定の後に資料調査をする」という基本の手順を、「大まかな資料調査で基礎知識を得てから問題設定をして、そこから、改めて資料調査をしていく」という手順に変える必要があったのでした。

また、前回行った問題設定には、ある問題点がありました。そこについても補足していきます。

前回の掲載分で、私は、『文章読本』における谷崎の態度について、「客観的」（三島）か「独断」（勝本）かという議論がある、というようなことを書きました。ただ、元の文章を確認すると、『読本』について書かれた箇所なんてほんの少ししかないのです。

流石にまずいと気づいた私は、資料をもういちど読み込んで、この問題をさらに考え直すことにしました。すると、「谷崎による「含蓄」の説明」という元々の調査対象から私が直感したのは、実は、谷崎における「言葉による表現の不完全さ」（伊藤 1973：106）だったことに気づいたのです。

谷崎は『読本』で言葉の不完全さを強調しています。私には「谷崎による「含蓄」の説明」はあまり論理的には思えなかったのですが、谷崎の論理としては、そもそも言葉は不完全さを伴うのだから、こう説明する他ない、というわけです。「客観的／独断」という評価の違いを知っていたことが、このことに気づくのを助けてくれました。

というわけで、現時点で設定できる問題は、「谷崎の『読本』において言葉の限界はどこに設定されているか」となります。

ここでお伝えしたいのは、問題設定にも推敲が必要だということです。問題設定は最初にすべき大事な作業ですが、そこで終わりにするのではなく、何度も書き替えていく必要があるのです。一見して遠回りをしているようですが、作業の無駄をなくそうと思うと、結局、これが一番の近道なのです。

ということで、今回の LA 通信はここまでです。次回は資料調査についてお伝えいたし

第 596 回：論文やレポートの書き方について（8）（DM）

ます。みなさんどうぞよろしくお願いいたします。

参考文献
伊藤，整（1973）「谷崎潤一郎」『伊藤整全集』（第 20 巻）新潮社、8-150 頁
勝本，清一郎（1972）「谷崎潤一郎と志賀直哉」日本文学研究資料刊行会[編]『谷崎潤一郎』有精堂出版、31-39 頁
三島，由紀夫（1975）「谷崎潤一郎について」『三島由紀夫全集』（第 32 巻）新潮社、445-455 頁